

トマス・アクィナスにおける“actio manens” としての感覚と知性について

藤 本 温

トマスの「留まる働き」actio manens—「移り行く働き」actio transiens の区別は、アリストテレスの『形而上学』θ巻8章(1050 a23-b2)における、能力の使用によって結果(所産)が生じない働きと、それが生じる働きの区別に起源を持つ。この二つの働きの区別はトマスの神学において縦横に機能しており、一例を挙げるなら、前者は内なる発出(三位一体論)に、後者は外なる発出(創造論)にそれぞれ対応している¹⁾。しかし、この二つの働きが『形而上学』θ巻6章(1048 b18-35)のエネルギー(actus)とキーネーシス(motus)の区別に重ね合わせられているかどうかについては、当該箇所²⁾の註解が書かれていないために断定的なことは言えず²⁾、また、そこから生じる解釈上の問題点は数知れないが、本稿では、論点を感覚と知性の働きを actio manens の観点から照射するという一点に絞り、その限りで、この働きの区別の意義を検討したい。『神学大全』(S. T., 1, 18, 3, ad 1)における主要テキストは次の通りである。

『形而上学』第9巻で言われるように、働き actio に二通りあり、一つは、熱する、切るのごとく、外的質料へ移り行く働きであり、今一つは、知性認識する、感覚する、意志するのごとく、働くもの内に留まる働きである。これらの違いは次の点にある。前者の actio は、動かすところの働くもの agens の完成ではなくて、動かされるもの自身の完成であり、これに対して、後者の actio は、働くものの現実態 actus agentis である限りで、働くものの動 motus と呼ばれる。このことは、こうした類似に、すなわち、ちょうど動が動かされるものの現実態 actus mobilis であるように、後者も、働くものの現実態である、ということに基づいている。ただし、『デ・アニマ』第3巻(431 a6-7)で述べられているように、動は『不完全なものの現実態』actus imperfecti、すなわち『可能態にあるものの現実態』actus existentis in potentia で

あり、後者は『完全なものの現実態』actus perfecti、すなわち『現実態にあるものの現実態』actus existentis in actu である。」

以上のテキストにおいて、次の二つのことが重要である。すなわち、観点①：actio が「留まる」か「移り行く」かの区別であること、及び、観点②：actio manens も類似に基づいて動と言われること、である。以下、このことを念頭において、二つの働きを個別的に検討することから始めよう。

I. 移り行く働き

「留まる働き」が生命あるものに固有な働きであるのに対して、「移り行く働き」は、生命あるものとなきものに共通な働きである (*De Pot.*, 10, 1, c.)。この働きは動とも呼ばれるが、動は「可能態にあるものの、可能態にあるものである限りの、現実態」actus existentis in potentia inquantum huiusmodi と定義される。純粋な可能態にあるものは未だ動いておらず、既に完全な現実態に到達したものは、もはや動いていないことから、動はそれらの中間にあるもの、すなわち、或る面においては可能態にあり、或る面においては現実態にあるものである (*In 3 Phys.*, n. 285)。「不完全なものの現実態」actus imperfecti という語は、動が存在している間は未だ形相が完成されないで可能態にあること、そして可能態にあるものはその限りで不完全であることからそう呼ばれる (*In 3 De Anima*, Leo., p. 230, 26-28)。また、「留まる働き」が働きが始まると瞬時に完成されるのに対して、動の方は時間においてあり、継続的に successive 完成されると言われるのも、このような動の不完全性に基づいているのである³⁾。

更に「動は動かされるものにおいてある」motus est in moto。これを以下、M方式と呼ぼう。M方式は、トマスがアリストテレスから継承した鉄則であり、動は動かすもの movens には付帯するだけであり、それは「動かすもの」が「動かされるもの」に接触する tangere ことによって、「動かされるもの」において生じる (*In 3 Phys.*, n. 301-2)。そしてこのM方式に基づいて、「移り行く働き」は「動かされるものの完成」であるとされ、例えば「建築の働き」は「大工の完成」ではなく「家の完成」を目指し、そこからそれは、目的としての (S. C. G., n. 831) 外的な結果に移り行く transeunt in exteriorem effectum (S. T., 1, 14, 2, c.) と言われる。

ところで、actio transiens とは、動かすもの movens の方のアクチオなのか、そ

れとも、動かされるもの *motum* の方のアクチオなのかということ、ここで明確にしておかなければならない。今仮に、前者を K1、後者を K2 としてみよう。そこでもし、*actio transiens* のアクチオが K2 だとすると、建築家 (K1) と木材等 (K2) の例において、「建築する」というアクチオが、「家のアクチオ」になってしまうであろう。確かに M 方式に従うなら、建築するという働きは木材等において、従って家の側で現実化するが、しかしこのアクチオを「家のアクチオ」と理解してしまうと、*移り行く transit* という動詞の意味が損なわれてしまう。何故なら、「家のアクチオ」とは建築家から移り行かれたものであり、移り行くのはむしろ建築する方だからである。従って、このアクチオは K1 の方であり、また、「移り行く働き」の例として挙げられるものがすべて能動的能力に基づくものであることから⁴⁾、それは外的質料へ「働きかける」という意味でのアクチオになる。そして、能動的能力の発現は第 2 現実態であり、受動的能力のそれは第 1 現実態であるから (*De Pot.*, 1, 1, c), 先の例で言えば、K1 は建築家の持つ建築能力の発現としての第 2 現実態、K2 は木材等において家の形相が完成されるという第 1 現実態を目指す「不完全なものの現実態」になる。

先に引用した主要テキストで、K1 の方は *actio*、K2 の方は *actus* と表示されており、当然、前者には“*actio-passio*”の *actio* が基にあり、後者では“*actus-potentia*”の *actus* が考えられている。この *actio* と *actus* は、可能態においては別物であっても、すなわち、*actio* の根源にあるのは能動的能力であり、*actus* の根源にあるのは受動的能力であるとはいえ、両者は現実態においては M 方式に従って「動かされるものにおいて」継起的に現実化する。しかし、我々は、K1 を *actio*、K2 を *actus* というふうに、現実態においても、ラチオ (説明方式) の次元での区別を立てておかなければならない。

II. *actio manens* と受動

actio manens の場合も、観点①において *actio transiens* と並べられていること、及び観点②における両者の類似性を考えるとき、これも「働きかけ」という意味で、すなわち、「働きかけ」が留まると理解するのが自然である。しかし、直ちに問われるであろう。*actio manens* の例として挙げられているもののうち、「知性認識する」と「感覚する」は受動的能力に属するものであり、それらは「働きかけ」という意味

での *actio* とは相容れないのではないかと。実際、ロナーガンは、この観点から以下の主張を提出している⁵⁾。すなわち、ロナーガンによると、感覚とか知性の受動が適合するのは、現実態においてある (*being in act*) という意味での *actio* であって、そのような受動としての働きの概念はトマスにとって馴染みのある (*familiar*) ものであった。そして、この *actio*, *operatio* を、作用因の実行、すなわち、強い意味で能動的に解するのは誤りであると説き、そこから更に、人間の意志もまた根源的には神によって動かされるという理由によって、意志をも受動のメンバーに組み入れているのである⁶⁾。このロナーガン説 (受動的能力を重視) と観点①② (能動的能力を重視) は真っ向から対立するように思われるが、我々としてはまず、認識における受動とは、如何なる事態を意味するのかを確認することから始めよう。

まず、感覚が受動であると言われるときに、それに対応する能動者として考えられているのは、さしあたり可感的対象である。例えば、次のように言われる。

『『自然学』第3巻で言われたように、能動 *actio* と受動 *passio* は基体においては一つの *actus* であるが、ラチオにおいては異なる。すなわち、能動が能動者 *agens* に由来すると表示され、受動が受動者 *patiens* に由来すると表示されることに従って異なるのである。そのようにして、上の箇所では『感覚されるものの *actus*』と『感覚するものの *actus*』は、基体においては同一であるが、ラチオにおいて異なるのアリストテレスは言ったのである」 (*In 3 De Anima*, Leo., p. 180,163-168)。

以上のテキストにおいて、「感覚されるものの *actus* (現実態)」とは、能動者としての可感的対象を、「感覚するものの *actus*」とは受動者としての感覚の働きを意味している。注意を要するのは、ここではM方式が *actio transiens* の場合とは逆に使われて、能動者としての可感的対象からの働きかけが、受動的能力としての諸感覚において現実化されると考えられていることである。そしてこれが感覚についてのごく一般的な説明であり、これによると感覚とは単なる受動に過ぎないが、しかしトマスによれば、感覚の働きは、志向的判断が伴う活動であるから、それは単なる受動以上のものである。すなわち、感覚もまた或る仕方では「判断する *iudicare*」能力であり⁷⁾、そのことは「見ること自身は、ものの真理に従えば物的受動ではなく、むしろ、見ることの根源的原因は魂の能力である」 (*In De Sensu.*, n. 50) という言明のうちにも看取される。感覚には単なる受動とは別の側面があること、このことがトマスの感覚論の特徴であり、それ故ここで我々が問うべきことは、感覚とか知性が *actio manens*

として語られるときに、受動とは別の（何か能動的な）側面が含意されているかどうかなのである。

Ⅲ. 能動的能力

ところで、先のロナーガンも、*actio manens* の根源にある能力が能動的能力であることは或る意味で認めている。しかし、その場合、能動的能力の内容ないし位置づけが問題になる。すなわち、ロナーガンによると、トマスには二つの能動的能力の定義がある (*Verbum*, p. 112)。一つは、後期著作において優勢である定義①「他のものである限りの他のものへの転化の原理」*principium transmutationis in aliud in quantum aliud* というアリストテレスの定義 (*Met.* Δ 1019 a15-16; Θ 1046 a10-11) であり、他は、前期著作において優勢である定義②「働きの根源」*principium actionis, principium operationis* というアヴィセンナの定義である。定義①の例としては、建築や医術といった技術が考えられており、*actio transiens* はこの定義①の中で理解される。他方、「働きの根源」としての能動的能力とは広い意味での能力であり、これによれば、アリストテレス的な受動的能力も能動的能力になる場合がある。そしてロナーガンは、この定義②と、アリストテレスのもうひとつの能動的能力の定義③「他のもののうちにはなく、そのもの自らとしてのそのもの自らのうちにあることろの原理（ピュシスと呼ばれる広い意味での能動的能力）」(*Met.* Θ 1049 b9-10)、の二つが、*actio manens* の根源にある能動的能力の意味であると解しており (*Verbum*, p. 112-119)、それは言い換えると、能動的能力の意味を拡張することによって、*actio manens* の根源にある能力が受動的能力でもあることと抵触しないように意図していることに他ならず、従って、そこでは能動的能力は消極の意味しか持ち得ないであろう。実際、ロナーガンの議論には、“... lest there be any misapprehension about Aquinas’ ideas on the *actio manens* in agente, I proceed to observe that not only sentire and intelligere but also velle can be a *pati*.” (*Verbum*, p. 132) という言葉からもわかるように、*actio manens* を受動という観点から捉えようとする意図が根強く働いているのである。しかし、そのように *actio manens* の受動的側面を強調する解釈が成り立ち得るかどうかは、トマスがそこから主要テキストの *actio* の区別を汲み取っている次の『形而上学』Θ巻8章の註解から判断されなければならないであろう。

「……或る能動的能力の究極目的は能力の使用のみであって、その能力の *actio* によって生み出された或るものではない。ちょうど、「見る能力」の究極目的が「見ること」であって、それの他に、「見る能力」から生み出された或る所産が生じることはないように。しかし、或る能動的能力においては、*actio* の他に或る所産が生じる。ちょうど、建築術によって、建築の働きそのものの他に、家が生じるように」(*In 9 Met.*, n. 1862)。

ここでは、魂の自然的能力である「見る能力」の発現が能動的と明確に語られており、そしてこのことがロナーガンの言う定義②ないし③意図するところでもあろう。しかし、今のコンテキストでは「見る能力」が受動的能力として語られることはなく、むしろ少し前の箇所では、それは受動的能力から区別されているのである(*In 9 Met.*, n. 1858)。それ故、*actio manens* の連関では、我々は、「見る能力」を第一義的には広い意味での能動的能力と解した上で、観点①②より *actio transiens* と類似していることから、それを「働きかけ」と強く解し、その後、もしそこに受動的側面も見受けられるならば、その点にも言及するというのが順序であろう。従って、感覚や知性は受動であるから「働きかけ」という強い意味での *actio* は馴染まないという前提から出発するロナーガン説を、我々は支持することはできない。「留まる働き」の受動的側面をあまり強調しすぎると、「留まる働き」—「移り行く働き」の区別が、「受動的能力」—「能動的能力」の区別に解消されてしまう危険が生じるように思われるからである⁸⁾。

では、観点②の類似を重視した場合に、決定的に問題になること、すなわち、その類似を徹底させると、*actio manens* にも何か結果が伴うことになるが——建築の働きに家という結果が伴うように——、しかるに、何かを「見る」ことによって、その対象が変化を蒙ることはないではないか、という疑問に対しては我々はどう対処すべきであろうか。

IV. 結果(所産)の問題

まず、*actio manens* の場合にも、観点②の類似に基づいて、「働きかける側」と「働きかけられる側」をラチオの上で区別して、前者を E1、後者を E2 と呼んでおこう。すなわち、E1 と E2 は現実態においては同一であっても、「魂の働きかけ」E1 が、外的質料へ移り行かないで、働くものに留まり、「働くものの *actus*」E2 になるとい

うふうに、ラチオの次元での区別を立てておこう。

さて、「留まる働きかけ」は生命あるものに固有な働きかけであり、生命の第一根源は魂であるから (S. T., 1, 75, 1, c.), actio manens は魂に根ざす能動的な働きかけであり、それが「結果を持たない」ということは、認識論的文脈では「魂の志向的働きは自然的結果を生ぜしめない」ということと内容的にパラレルに考えることができる。そして、認識は認識対象の完成を目的としてなされるのではないとすると、「魂の志向的な働きかけ」E1 が完成しようと目指すものはいったい何なのか？。トマスの解答は「働くもの自身の完成」である。すなわち、可能態にある認識能力は「現実態における認識」をめざして外界へと向かい、知性の場合だと直接的には表象像に向うが、類似的に用いられたM方式に従って、いわば光が対象に反射して瞬時に帰ってくるように、その働きかけは最終的には自己へと帰還し、自己の働きの完成に向かう⁹⁾。魂に発した志向する力が、対象から形相を引きつけて自らへと帰還することをめざすという点で、留まる働きかけは、働きかけるもの自身の(働きの)完成を目的としているわけである。また、留まる働きかけは「結果を持たない」ということは、自己の外部に自然的な結果を持たないという意味に、逆に言えば、自己の内部に自然的ではない結果を持つと解されるであろう。この「自己の内部における自然的ではない結果」とは、知性の場合、現実態にある知性 intellectus in actu であり、実際トマスは『真理論』(8,6,c.)において、「現実態にある知性」を結果 effectus と呼んでいる (cf. S. T. 1,54,1,ad 3)。そして、知性の場合、E1 の根源にあるのは能動知性、E2 の根源にあるのは可能知性であることを示唆し、この二つの知性の区別は或る意味では付帯的なものであって、現実態においてはそれらは知性認識されるものと「一つ」になっているのだと言う。この「現実態にある知性」とは、形相によって瞬時に「認識されるもの」になっているところの結果としての知性に他ならない。

しかし感覚の場合には問題が残ると言われるであろう¹⁰⁾。すなわち、感覚は可感的対象があれば直ちに発動するが故に、その場合には、魂の「働きかけ」の位置づけが問題になると。

だが、可感的対象があっても、魂の intentio を欠いた感覚能力は本来的な意味では発動できない。例えば、我々が何かに集中しているときには、その他の事物に対しては魂の intentio を欠いており、その結果、外界の物音が気にならないことがあるようにである¹¹⁾。魂の「働きかけ」の強弱が認識内容に影響を及ぼすわけである。それ故、

この点を考え合わせると、感覚が *actio manens* の文脈で語られる場合には、我々はまず（可感的対象ではなく）魂の志向的な在り方に目を向けなければならないであろう。そこでは、可感的対象からの一方的な働きかけによって受動し刻印される裸の感覚ではなく、むしろ魂の *intentio* の在り方に伴う感覚認識をも問い得る地平が拓かれているのである。このことと、「認識は認識されるものではなく認識するものの在り方 *modus* に従う」というトマスの認識論における基本命題との関係の詳細な検討は別の機会に譲らなければならないが¹²⁾、感覚の場合、この命題は「或るものが他のものの内に靈的に受け取られるのは、或る *intentio* の在り方による」*aliquid recipitur in altero spiritualiter per modum intentionis cuiusdam* (*In 4 Sent.*, 44, 3, 1c, c.) と言い換えられるのである。

あるいは、次のようにも言えよう。すなわち、感覚の働きは一方で「完全なものの現実態」*actus perfecti* としての「留まる働きかけ」に分類されながらも、他方でその働きが身体的器官の現実態であることから「不完全な現実態」*actus imperfectus* と言われるように、独特の位置づけを与えられている¹³⁾。そして、各々の感覚には、質料の対象ないし身体との連関で語られる自然的存在 *esse naturale* と、魂との連関で語られる志向的存在 *esse intentionale* の両方がそれぞれの度合いで見出されるが (*S. T.*, 1, 78, 3, c.)、感覚が *actio manens* の文脈で論じられる際には、我々はそれら二側面のうちの「完全なものの現実態」とか「志向的存在」の方に着目しなければならないのである。

最後に、総括しておこう。「留まる働きかけは、完全なものの現実態である」*actio manens est actus perfecti* と言われる場合の、*actio* と *actus* は、現実態においては一つであっても、ラチオの次元では区別される。すなわち、能力としてみるなら、*actio* の根源にあるのは魂の志向的な働きかけを有するものとしての感覚や知性であり、*actus* の根源にあるのは、いわゆる受動的能力としての感覚や知性であるが、この二つは現実態においては「一つ」であり、更に言うなら、形相によって対象と「一つ」になっている (*S. T.*, 1, 87, 1, arg.-ad3)。そして、*actus* ではなく、*actio* の区別として語られる時には、E2 ではなく、E1 の方が前面に出ていること、すなわち、世界に対して自己の能力を開き、何も邪魔するものがなければ諸事物へと志向的に働きかけ、そして瞬時にその働きは完成されるという、そのような生命あるものに固有な「働きかけ」の存在が記述され強調されていると言えるであろう¹⁴⁾。

註

- 1) この区別は人間の場合、知性、意志、感覚、快楽、幸福、愛の文脈で登場する。
- 2) 『形而上学』θ巻6章後半はメルベケのラテン訳が存在しないが、トマスは複数のラテン訳を参照したと思われることから、その箇所が全く知られていなかったかどうかは確定できない。ただそのことを離れても、ラテン語の *actus-motus* は、トマスの *actio*, *operatio* 概念を分析する際に重要である。なお、アリストテレス研究において6章後半と8章当該箇所の関連を認めるものは、山口義久：アリストテレスにおける *ΕΝΕΡΓΕΙΑ* と *ΚΙΝΗΣΙΣ* の区別 (古代哲学研究 *Methodos* XI 1979) p. 30, Penner, T., *Verbs and the Identity of Actions,—A Philosophical Exercise in the Interpretation of Aristotle* (Ryle, ed. G. Pitcher and O. P. Wood, Macmillan 1970) p.439-40, n. 37, 「速断できない」とするのが藤沢令夫：現実活動態 (『イデアと世界』所収・岩波書岩 1980) p. 294-5 である。その他、桑子敏雄：エネルギーの文脈 (一) (アカデミア人文社会科学編 (47) 第一分冊・1988), 牛田徳子：現実態と可能態の概念 (『アリストテレス哲学の研究』第2章・創文社・1991) も参照。
- 3) S. T., 1-2, 31, 2, ad 1. 「不完全なものの現実態」*actus imperfecti* の “*imperfecti*” という中性名詞の属格は、動の定義 *actus existentis in potentia in quantum huiusmodi* の “*existentis*” という属格に合わせたものである。「完全なものの現実態」*actus perfecti* の属格 “*perfecti*” も同じ理由によるが、これは働きが始まると瞬時に形相が充たされ、可能態を含んでいないことから「完全なもの」と言われる。しかし、*actio manens* の内部に若干の動ないし可能態が認められる例外的な *actus* があって、この場合には、*actus imperfecti* と区別するために、形容詞 *imperfectus* ないし *incompletus* を付して「不完全な現実態」*actus imperfectus* と言われる (S.T., 1-2, 31, 5, c.; *ibid.*, 1, 85, 3, c.). 筆者の見るところ、この原則は S.T. では自覚的に守られている。しかし、『註解』では、アリストテレスが動が不完全 (未完了) であることを *ἀτελής* と形容詞で表現し、これが (*actus*) *imperfectus* とラテン訳されるため、トマスも、本来の動の場合でも *actus imperfectus* と形容詞を付すことがある (cf. *In 11 Met.*, n. 2305). なお、*actus perfecti* には、*De Anima* (431a7) の *ἐνέργεια τοῦ τετελεσμένου* の訳語としての一面もある。また、*actus agentis* は、対象を現実化するのではなく、「働きかける側の」現実態である、というほどの意味である。
- 4) 例として、熱する、切るの他に、動かす、創造する、機を織る等が挙げられる。
- 5) B. J. Robergan, *Verbum Word and Idea in Aquinas*, edited by D. B. Burrell, C. S. C., University of Notre Dame Press: 1967, p. 107-124. 特に p. 109.
- 6) 確かに人間の場合、意志は「動かされて動かすもの」*movens motum* であり、

その限りでは受動的な能力に属する (S. T., 1, 80, 2, c.). しかし多面、意志は「動かされて動かすもの」 *movens motum* でもあり、その場合には能動的な性格が意志に付与される (S. T., 1, 82, 4, c.). 従って、問題は、*actio manens* の文脈で語られる意志が、この二側面のうちのどちらを意味しているか、ということである。

- 7) S. T., 1, 78, 4, ad 2; *ibid.*, 1, 17, 2, c.; *In 2 De Anima*, Leo., p. 118, 34, etc.
- 8) この批判の根拠は、もとを正せば、先に K1 と K2 を区別したことにある。ローナーガンは、この区別を曖昧にして、どちらかといえば K2 の方で (従って、受動の文脈で) 議論を展開している。しかし、*actio transiens* という場合の *actio* は K1 の方であり (本稿第 I 節)、*actio manens* もこれ準ずる。
- 9) *intentio* と光の相違及び関係については、*In 2 Sent.*, 13, 1, 3, c.; S. T., 1, 67, 3, c. etc. を参照。また、能動知性が光に喩えられることにも注意。
- 10) 以下、中世哲学会 (於：東北大学 1991, 11, 18) における、宮内璋・加藤信朗両先生の御質問との関連で生じ得る問題について、若干の整理を試みた。
- 11) *intentio* という多義的な概念の分析は別の機会に譲るとして、今挙げた例に関して言えば、それは「魂の集中力としての *intentio*」である。すなわち、「魂のすべての能力は魂の一なる本質に根ざしているから、一つの能力が現実態において志向されているときには、他の諸能力は現実態において縮小されているか、全面的に妨害されている」 (S. T., 1-2, 77, 1, c.) と言われる場合のそれである。
- 12) 件の基本命題と *actio manens* の関係は *De Unitate.*, Leo., p. 312, 206-225 を参照。ただし、この基本命題をプロタゴラス的な相対主義的命題と同一視してはならない。
- 13) S. T., 1, 78, 3, c. 感覚の位置づけは、神学的文脈では、感覚は *actio manens* であるけれども、その働きは身体的器官の現実態であるという理由から、神の内なる発出は三つにならない、すなわち、知性と意志に基づく二つだけであるとされる (S. T., 1, 27, 5, c.). なおトマスの用語法については註3) を参照。
- 14) 以上は、*actio* の区別として語られる場合の一解釈である。我々の次の課題は、この認識論的な意味での「働きかけ」の内実と、真・偽の問題との関係の探求である。